体育におけるマイクによる指導に関する「体育科教育学」的事例研究：昭和55年度～58年度に亘る金沢大学小学校教員養成課程の「個人運動」の鉄棒指導と昭和56年度～57年度に亘る金沢大学体育学科の「器械運動」の指導の場合

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 石田, 保之
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24859

体育におけるマイクによる指導に関する「体育科教育学」的事例研究

——昭和55年度～58年度に亘る金沢大学小学校教員養成課程の「個人運動」の鉄棒指導と昭和56年度～57年度に亘る金沢大学体育学科の「器械運動」の指導の場合——

石　田　保　之*

Ⅰ．動機及び目的

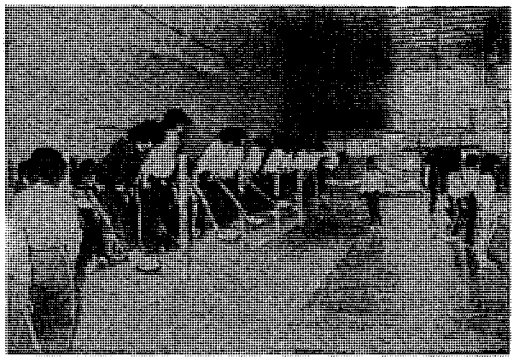
「個人運動」は、金沢大学では小学校教員養成課程のための体育の選択科目であるが、小学校教員養成課程の学生の殆んど全員が受講している。「個人運動」は私とT.Y.教官とH.M.教官の3名で担当し、総勢約200名を大約均等に3グループに分け、学生達をローテイションさせて、各教官が自己の担当種目を3回担当する形式をとっているので私は鉄棒を約3回（100分授業で約3回）担当している。

1群につき指導時間が3回しかないので、1分1秒を惜しみ、1欄2ｍの低鉄棒（この低鉄棒は昭和54年に私が開発しメーカーに特注したもので、ピン固定式でバーを10cmきざみに1ｍ以上1ｍ40cm迄5段階に上下調節可能にした一連式の体育館用低鉄棒で、支柱はバレーボールの支柱大の方形、埋込みは床面より50cm、支柱の長さ1ｍ90cmという日本随一を誇る低鉄棒である。(尚このバーの性能使用感等については昭和56年の日本体育学会総会で発表)この6欄を使用し、鉄棒運動の基本と初歩技術のエッセンスを一斉指導方式で私が創案した独自の段階指導法即ち「正課における効率的器械運動の段階指導法」により指導しているのであるが、何しろバスケットボール2面の床面積しかない体育館に、3人の教官が1人は鉄棒、1人はマットと跳箱、1人は陸上競技を同時に行なっているので、場所が狭隘であるばかりでなく、そこで生ずる騒音は大変なもので、大声で説明してもなかなか声が学生全体にとどかないというのが実情である。このため授業を終えた時にはクタクタになるのが常であった。

私は昔府立六中並びに都立六中（現在新宿高校）時代には、2000名の大集団に対して「六中体操」(別名殺人体操といわれた最高にハードな一連の自校体操）を業間体操の時間に見事に呼称をかけ通せるだけの声量を誇った実績をもっているので、十分な声量で大集団を指揮する能力には自信をもっているが、年齢のせいもあってかこの入り混った混成雑音の中で100分に亘って説明をするのには悩まされ続けてきた。そこで先年来マイクを授業で使ってみたらと内心

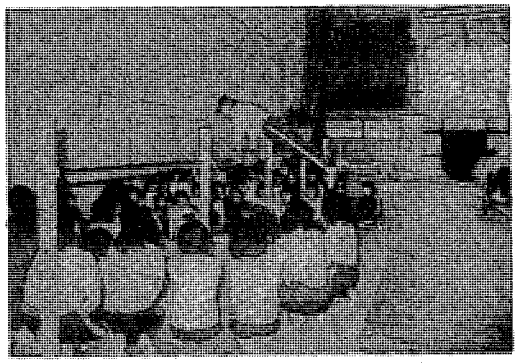
金沢大学新開発の高性能低鉄棒

*石田保之　　金沢大学教育学部



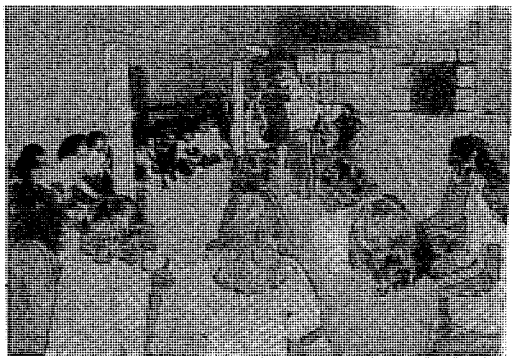
「個人運動」での鉄棒の振り上げの指導（S.57）

「個人運動」での鉄棒の後転の指導（S.57）

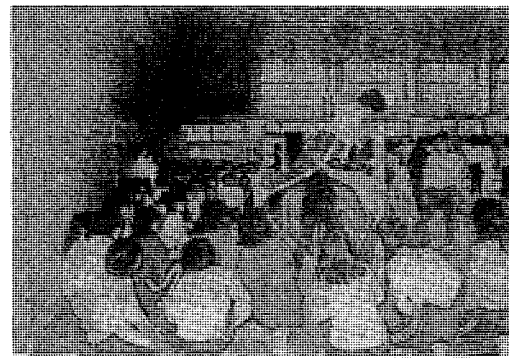


「個人運動」での鉄棒の振り上げの指導（S.57）

「個人運動」での鉄棒の後転の指導（S.57）



「個人運動」での鉄棒の脚かけ上がりの指導（S.57）



「個人運動」での鉄棒の後転の指導（S.57）

「個人運動」での鉄棒の片脚かけ後転の指導（S.57）

「個人運動」での鉄棒の後転の指導（S.57）

考えていた。

Ⅱ．研究方法

そこで今回（昭和55年度）思い切ってマイクを試しに使用してみる事にし、他の２名の教官には邪魔になるようだったらすぐに中止するという条件で小学校課程（約70名）の授業で試してみた。マイクはSONYのelectret condener mic を使用し、ラジオカセットは SONY の Rhythm Capsule 9000 を使用した。尚、カセットは体育館左奥のコンセントより10ｍコードを使用し、位置は概ね低鉄棒の中央より左寄りのところに置いて使用した。

テストを３回行なったところ、ボリュームをあげさえしなければ、別段支障はないということだったのでほっとした。

もともと私は、前述の六中時代の体験から、授業でホイッスルを使うことさえも好まず恥として来たくらいであるから、マイク使用に踏み切るには強い心理的抵抗があったが、半面或いは案外効果的かもしれないという淡い期待もわずかではあるがあった。

テストの結果「個人運動」において好結果を得たので、50～60名でバスケットコート2面を使って授業を行なっている体育学科の授業でも使うことにした。そして小学校教員養成課程における３年間、体育学科における２年間の使用結果から、次のような結論を得た。

Ⅲ．結果と考察

①一番気になったのは、同じ体育館内の他の教官の妨害になりはせぬかという事だったが、このことは全く杞憂であった。

②学生の指導についてであるが、「個人指導」の鉄棒指導では、今迄聞きとりにくかった私の声がすべて明瞭に聞きとれるようになり、学生の理解が一段と促進されたことが明らかに認められた。

③マイクとスピーカー位置とが近いと具合いが悪い。又スピーカー位置とマイク位置の距離関係（学生側からみての）を考える必要がある。

④最大のメリットは、学生達全体に対し、全体と個人、近くの者と遠くの者というように適時適刻に最大限に無制限に適切な指導上の指示を与えることが出来たことで、その点全く思いがけない効用であることを発見した。機械の威力といったところである。

体育指導においては号令や呼称を常に十分な声量でかけることはなかなか大変であるが、十分な声量で指導上の色々の証明をすることは更に難かしいという事情がある。したがって④項は極めて高く評価される。

⑤このため、指導する大集団の全体と個人とを同時に掌握しておくという器械指導で最も難かしい課題が極めて容易になった点も極めて高く評価される。このことは傷害防止安全確保上からも重大なる意味がある。

⑥金沢大学の場合体育館が教室から離れているので、教室への配慮は全く不必要であった。

⑦肉声で与えた指示に対し、マイクで与える指示は、ややソフトであるように思われるが、指導効果には差異がないように思われる。

⑧マイクを使うようになってからは、授業が大変楽になり、疲れなくなり、一層楽しくなった。

⑨自分でデモンストレーションをする場合は、いちいちマイクを置いて行なわなければならないので、この場合の説明や指示には具合が悪い。

⑩小学校教員養成課程の「個人運動」の場合には、どうしようもない騒音の中で、説明を極度に妨げられたが、マイクを使用すると小さい声で全員に説明を容易に徹底することが出来るようになった。

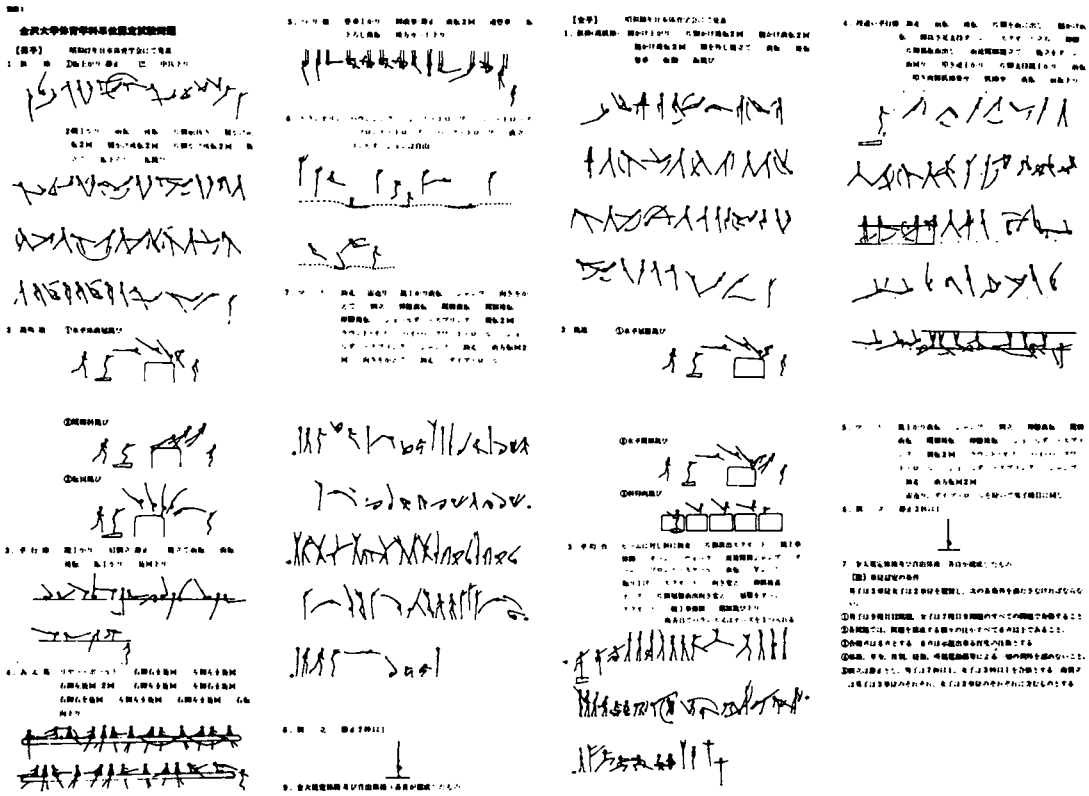
⑪体育学科の場合は、場所が広く分散し（バスケットコート２面）各種の器械を使って授業を行なっているので、これを掌握する上からも指導効果を上げる上からも効果的である点が認められた。

金沢大学小学校教員養成課程「個人運動」鉄棒試験問題

女子　逆上がり－後転－踏越下り

男子　蹴上がり－前転－後転－腕立横跳越し

金沢大学体育学科体操単位認定試験問題



⑫授業内容で説明的要素が多ければ多い程、当然の結果としてマイクの使用価値は大となる。

私は小学校教員養成課程では鉄棒教材を教授し、体育学科では別表の様な尨大な数の技術を教授しているので、学生に対する言語による指導や指示が授業時間中において占める割合が大きいので、その点マイク使用の価値が、量的意味において高く評価される。

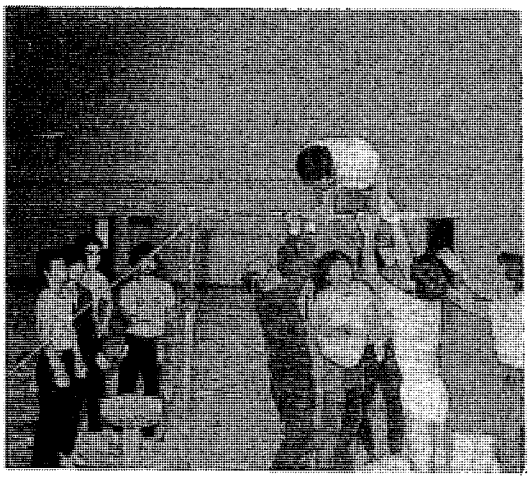
⑬又声量のみならず声質をも若干調整して指導することが出来るので、その点マイク使用は質的にみても評価される。

⑭これは当然なことであるが、遠い距離にいる学生達に対する指示を容易にし、指導を徹底させることが出来るのはマイクのメリットである。

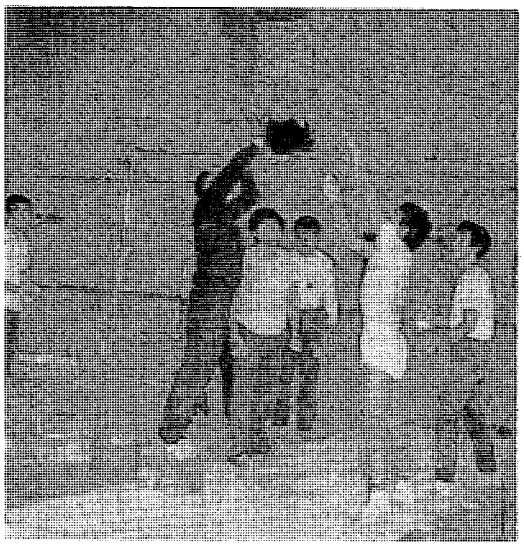
Ⅳ．あとがき

今後更にマイクを使った指導を維続し、その場合のデータを更に多く且つ詳細にあつめ、問題点を解決し、より一層指導効率の高い授業の開発を試みたいと考えている。

体育学科における鉄棒逆手車輪の指導（S.46）



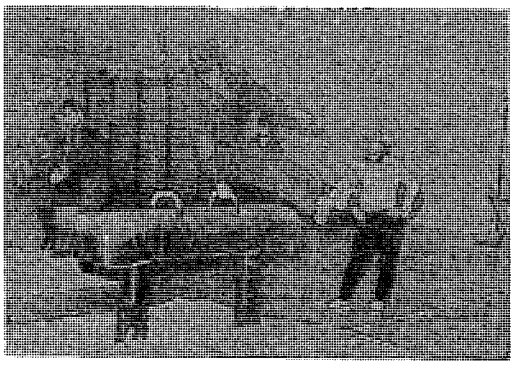
体育学科における鉄棒逆手車輪の指導（S.46）



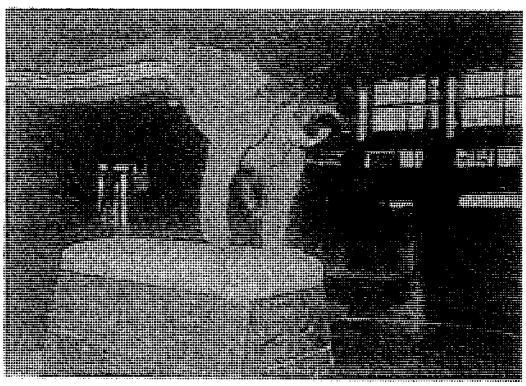
体育学科における鉄棒逆手車輪の指導（S.46）

体育学科における鞍馬の指導（S.47）

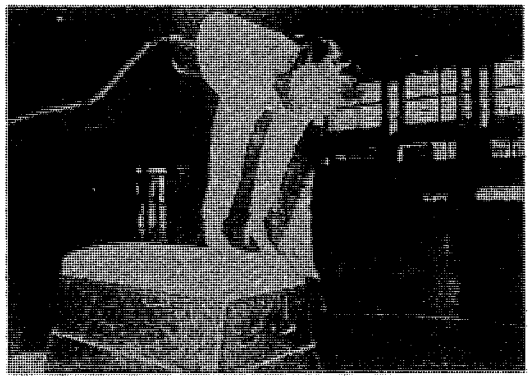
体育学科における鞍馬の指導（S.47）



体育学科における鞍馬の指導（S.47）



マイクによる体育学科水平開脚跳び(♀)の指導
（S.57）

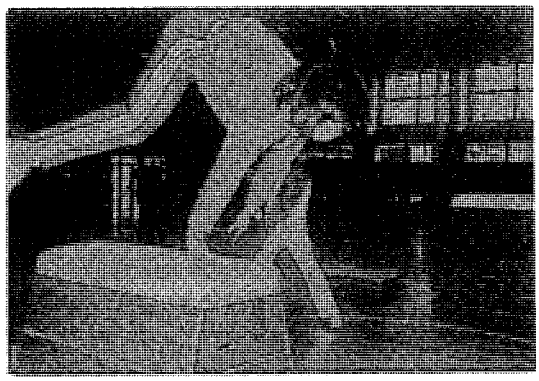


マイクによる体育学科水平開脚跳び(♀)の指導
(S.57)

マイクによる体育学科水平開脚跳び(♂)の指導
(S.57)

マイクによる体育学科水平開脚跳び(♀)の指導
(S.57)

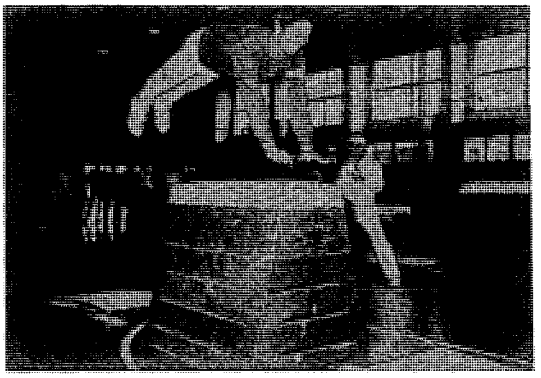
マイクによる体育学科水平開脚跳び(♀)の指導
(S.57)



マイクによる体育学科水平開脚跳び(♀)の指導
(S.57)

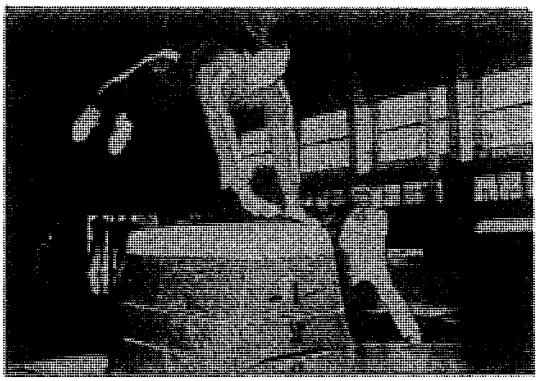
マイクによる体育学科水平開脚跳び(♂)の指導
(S.57)

マイクによる体育学科水平開脚跳び(♂)の指導
(S.57)

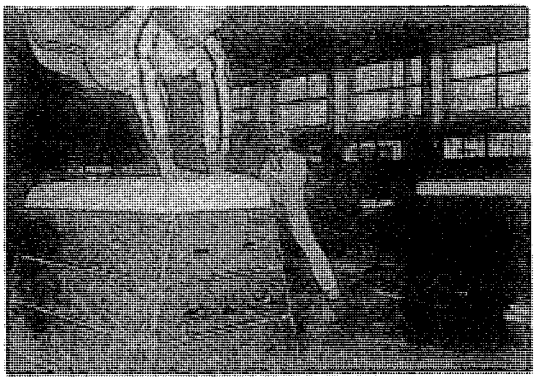


マイクによる体育学科水平体前屈跳び(♂)の指導
(S.56)

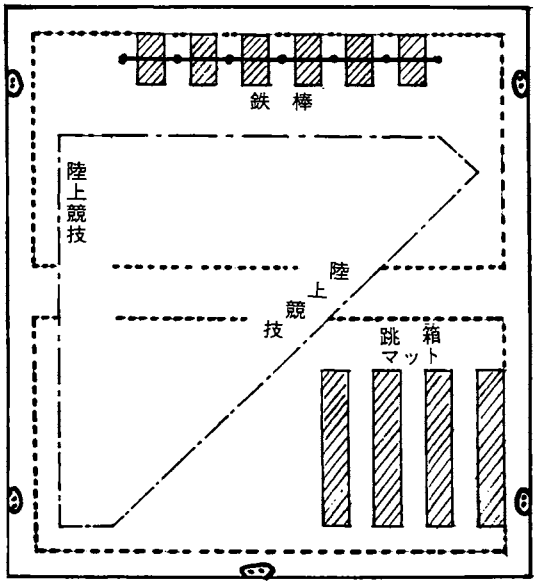
マイクによる体育学科水平開脚跳び(♀)の指導
(S.57)



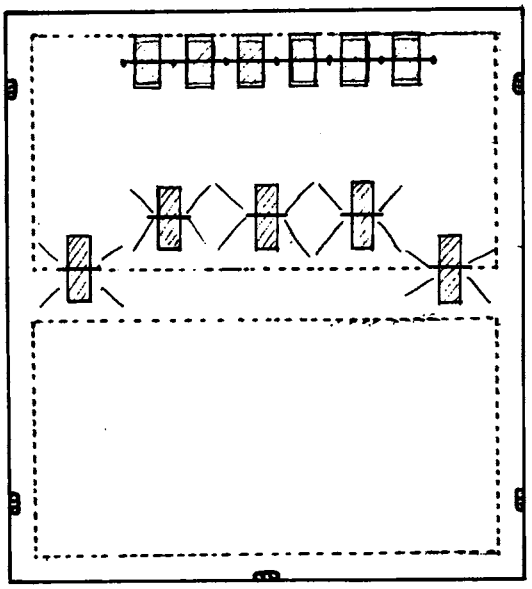
マイクによる体育学科水平体前屈跳び(♂)の指導
(S.56)



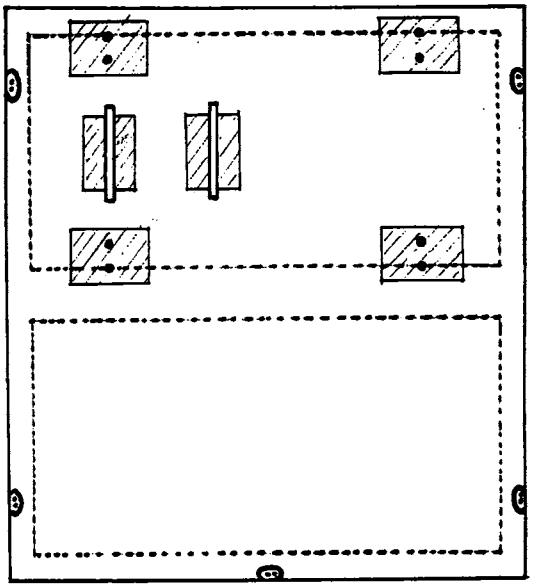
マイクによる体育学科水平体前屈跳び(♂)の指導
(S.57)



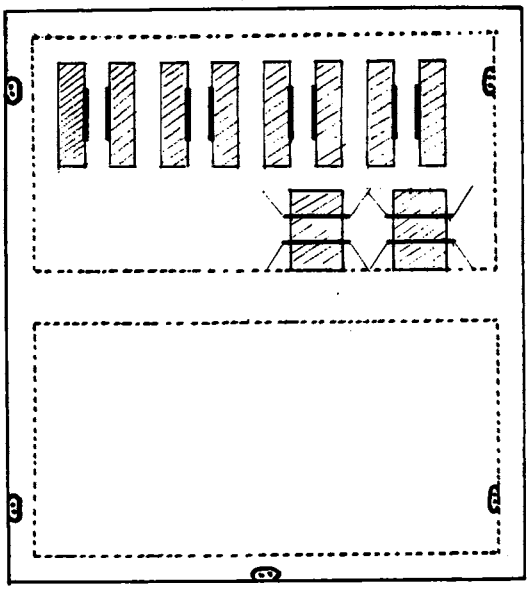
小学校教員養成課程「個人運動」指導区域図



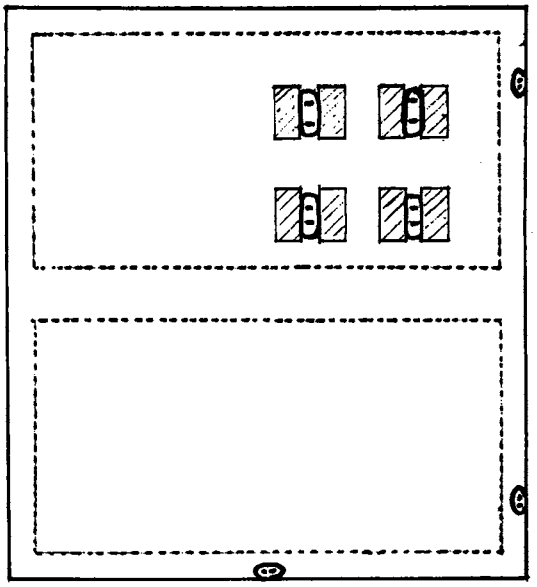
体育学科　鉄棒配置図



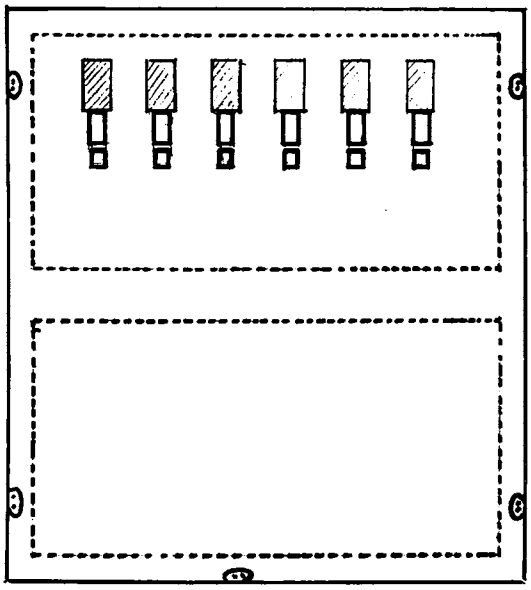
体育学科　吊輪，平均台配置図



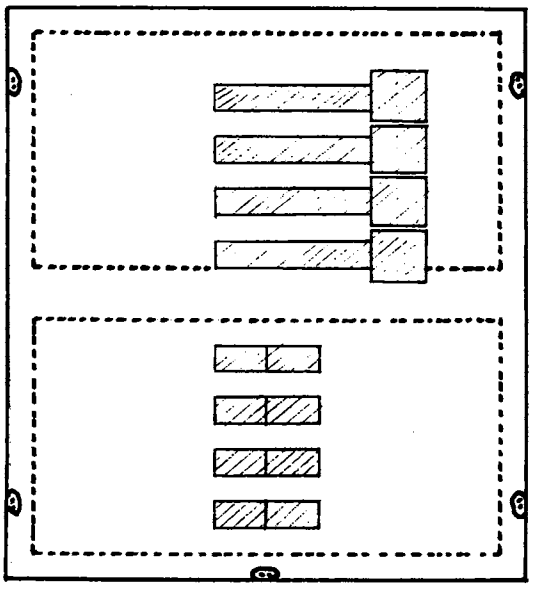
体育学科　平行棒，段違い平行棒配置図



体育学科　鞍馬配置図



体育学科　跳箱配置図



体育学科　マット配置図

（註）尚、昭和58年３月より、ワイヤレスアンプは、東亜特殊電気製のWA500Cを使用、ワイヤレスマイクは、同社製のWM－210－2chを使用

参　考　文　献

石田保之著『スタンツの理論と実際』逍遙書院（S.30.10）

石田保之著『器械運動』不昧堂出版（S.36.6）

石田保之著『器械運動の段階指導』不昧堂出版（S.51.9）

石田保之：器械運動技術指導論
金沢大学教育学部教科教育研究　第９号
71～79（S.51.7）

石田保之：鉄棒運動における女子低能力者の技術の進歩過程に関する事例研究
金沢大学教育学部紀要　第25号
65～72（S.52.1）

石田保之：安全を確保し効率を高める器械運動指導論
金沢大学教育学部教科教育研究　第10号
89～104（S.52.7）

石田保之：鉄棒における「片脚かけ系」スタンツの技術特性の系式化と指導段階に関する研究
金沢大学教育学部紀要　第26号
55～62（S.53.1）

石田保之：体育におけるイメージ学習に関する研究
金沢大学教育学部紀要　第27号
115～125（S.54.3）

石田保之：金沢大学体育学科における器械運動の評価に関する研究
金沢大学教育学部教科教育研究　第13号
1～14（S.54.7）

石田保之：器械運動における学習初期のつまずきに関する研究――昭和53年度金沢大学体育学科卒業生の場合――
金沢大学教育学部紀要　第28号　43～53（S.55.1）

石田保之：教師の示範力と体育授業
「体育科教育」昭和56年３月号
「体育における教師の指導力 特集号」
43～45（S.56.3）

石田保之：落ちこぼれ解消論（総論）
――器械運動の段階指導を通してみたその体育学的領域よりのアプローチ――
金沢大学教育学部教科教育研究　第17号

1～16（S.56.7）
石田保之：落ちこぼれ問題を斬る
——その「体育科教育学」的アプローチ——
金沢大学教育学部教科教育研究　第18号
1～16（S.57.10）
石田保之：「スポーツ教育学的」見地よりみた教材見直し論に関する基礎的研究
——その器械運動よりのアプローチ——
日本スポーツ教育学会スポーツ教育学研究　第1巻　29～34（S.57.11）
石田保之：体育においては特定教材の出来ない者が必ずいるという共通概念に関する体育科教育学的アプローチ
——金沢大学小学校教員養成課程M.T.（♀）の鉄棒の脚かけ上がりの技術習得を通して—
金沢大学教育学部紀要第32号　47～61
（S.58.2）